

阪本ちづみ先生 追悼文

著者	鈴木 豊
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	34
号	別冊
ページ	1-3
発行年	2018-03
URL	http://doi.org/10.15002/00014848

阪本ちづみ先生 追悼文

経済学部長 鈴木 豊

2016年の9月28日、阪本ちづみ先生が急逝されました。秋学期に入って間もないころの執行部会議の日で、学部長室で慌ただしく会議をしていた最中に届いた、とても悲しいニュースでした。

昨年私は教授会主任でしたが、今年は学部長となって、阪本先生の追悼文を書かせていただく立場となったことにも、御生前ともども何かの縁を感じます。というのは、阪本先生と私は、法政大学経済学部に同期（1995年）で採用された関係で、中国語（阪本先生）と理論経済学（私）と、研究分野が全く別な割には、気軽に話の出来る間柄でした。（少なくとも、私はそう思っていました。）思い出としましては、1995年4月の市ヶ谷での新任教員歓迎会の後、同期就任の渡部先生（体育）、阪本先生、松波先生（環境経済論）、そして私で、新宿のバーに2次会に行ったことが懐かしく思い出されます。たしか、大学院博士課程を終えて、特別研究助手で就職した私が、学生のノリから抜け出ぬまま、体育の渡部先生に、「皆で2次会に行きましょうよ。」と誘ったのだと思います。そして……われわれ4人は新宿歌舞伎町の渡部先生の馴染みのバーで、恐らく高いお酒（ウイスキーなど）を飲みながら、楽しくカラオケを歌いまくったのでした。今のように「カラオケ・ボックス」ではなく、バーですので、市場価格にすれば相当なものだったのかもしれませんが、渡部先生の計らいで、新人の3人（阪本先生、松波先生、私）は、特別な料金で楽しませていただいたように思います。その時は、あまり気づきませんでした。阪本先生も相当なお酒好きでしたので、4月の市ヶ谷の外堀の夜桜を見た後で、就任祝いに（自分へのご褒美に）飲みに行きたかったのかもしれないね。

それと、法政への就任以来、たぶん、周囲から結婚できないだろうと思われて

鈴木

いた私が、1999年10月に結婚できた際、同僚の先生方が、京王線の狭間駅近くの飲み屋で、ささやかなお祝いを開いて下さったのですが、妻も出席するという事で、阪本先生は廣川みどり先生とともに出席してくださり、妻の話し相手をしてくださいました。その時、「みどり、ちづみ、さゆり（妻）と、皆ひらがなの名前ですね。」といった妻の話にも気さくに応じてくれ、留学生から慕われていたことと合わせ、その人柄が改めて偲ばれるところです。

さて、思い出話はこのくらいにして、阪本先生は、経済学部で中国語担当の助教授として採用され、以来22年間、学部の中国語教育を支えてこられました。1978年の「改革開放」以後、中国経済が著しく発展を遂げ、1990年代以降も「世界の工場」として、二けたの高度成長を続けていたことも「中国語」ブームの大きな要因であったとは思いますが、やはり、阪本先生の教育の上手さとその人柄が、学部の中国語の受講者数を大幅に増やしていったことは想像に難くありません。特に、近年では、中国からの留学生（日本語留学生）の良き理解者として、阪本ゼミには多くの留学生が集まっていました。その意味で、学部の中国語教育・留学生支援への貢献は大変大きなものがあり、学部長として、これまでのご尽力に感謝申し上げる次第です。

追加となりますが、大学卒業後、5年ほど大手商社の中国担当事務室で働いていたキャリアを生かされ、多摩4学部の持ち回りで行う「キャリアデザイン論」の経済学部担当教員も務められました。これは、「キャリアデザイン」というテーマのもと、どのように自分らしさを磨き、どのように大学で学び、どのように大学で学んだことを仕事につなげるか、どのように仕事を選ぶか、その手がかりを探ることを目的とする授業ですので、まさに阪本先生は適任といえたかもしれません。受講生も多い人気の授業でした。

その他、阪本先生は、教授会執行部の副主任（2002年）および主任（2011年—12年）を務められ、教授会の運營業務にも多大な貢献をされました。執行部の仕事（激務）は、ご自身へも、またご家族へもご負担となったことでしょうから、そのご尽力・ご貢献に対し、学部を代表して、感謝申し上げたいと思います。

阪本ちづみ先生 追悼文

最後に、ご研究に関しては、ご主人の牧先生のご説明にお任せしたいと思いますが、1920、30年代の中国大衆小説である張恨水作品の研究を中心に進めてこられたとのこと。書かれた論文のタイトルと要約を拝見しますと、張恨水作品を、都市構造、近代交通（特に鉄道）、映画、メディア、近代建築、近代病理、ジェンダーの視点から読み解く切り口で論考した後に、自らの哲学的な思索で締めくくるといふ論文のスタイルであったとのこと。張恨水研究には、大学院時代からずっと取り組まれていたようですね。経済学者である私も、学部時代・大学院時代に取り組んだ「情報の経済学、契約理論、ゲーム理論」をずっと研究分野としており、また、特定の学者（私の場合は、Jean Tirole や Oliver Hart といった近年ノーベル経済学賞を受賞した経済学者ですが）の論文を読んで刺激やヒントを得た後、自らの視点と問題意識に立った分析・考察を行い、論文に仕上げるという点で、論文執筆スタイルの共通性も垣間見ることができたように思います。

阪本先生は、最近の翻訳業を通じて、中国における人権問題、民主化という観点にも問題意識を広げられていたようで、それを基盤として、中国文学のご研究をこれから一層推進させていく予定であったろうと思います。そんな中で急逝されてしまったことは、残念でなりません。やり残された部分は、天国で、ゆっくりと取り組んで頂けたらと存じます。

阪本ちづみ先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。